

# アメリカの高等学校を見て

—— インディアナ州・サウスベンド市において ——

中 野 満 男

昭和53年10月8日夕刻、我々文部省派遣海外教育事情視察団は、最後の見学地であるインディアナ州 South Bend の静かなローカル空港に降りた。

空港に出迎えてくれた教育関係、学校関係の人達の笑顔と握手、そして先生達が運転する車で行くこの町の緑に埋った豊かさや広さ、それはヨーロッパのよそよそしさやニューヨークの冷たさとは全く異った、健康なアメリカの地方都市の暖かさであった。

我々は、飛行機の中で、Time誌やAmbassador誌などに掲載されているアメリカ教育の恐るべき荒廃の姿を、英語の先生に翻訳してもらいながら「予習」して来たのだった。しかしこの都市の学校にはこの記事の内容が殆どあてはまらないことを、翌日からの見学ではっきり知らされることになったのである。

それでも、翌朝我々が学校の近くで車を降りて、広い芝生の中の道を校舎に近づいて行った時、玄関の近くで煙草を喫う生徒の一团を見たときにはいささか緊張した。女生徒もいる。白人も黒人もいる。しかし先生は悠然と歩きながら笑顔で我々を振り返り「煙草だけだったらいいのだが彼等は麻薬に進む心配があるんで困るのですよ。」と意外に平気である。近づくとお互いに笑って挨拶を交している。喫煙する生徒は毎朝何となく大部分がここへ集って来て“始業前の一服”をやるそうで、隠れて喫う者もないし、他の場所で喫う者もあまりいないので、この約30人くらいが事実この学校の生徒の全喫煙人口だそうだ。だとすれば先生の言う通り1,400人の生徒の中ではそれ程多い数ではない。もっとも、少ないから放置しているというわけではない。未成年者の喫煙を禁止する法律がないから場所と時間を学校が規制しているだけである。

こうして我々は、この珍しいお出迎えを受けてRiley ライリー高校へ全員が到着した。学校へ入るとすぐケーキと飲み物の朝食をご馳走になる。ここでは我々各人の席に2名ずつの高校生が同席した。私の横にはライリー高校のT・Matt君と、John Adams ジョン・アダムス高校のM・Caven君が坐った。カヴン君は黒人である。彼等は我々がこれから見学する2つの高校から1名ずつの生徒で、その学校見学の際に我々を案内する役目だという。The South Bend Tribune というこの地方新聞のその日の夕刊には、その時の

様子が次のように書かれてあった。

……彼等は彼等のstudent hostを紹介され、一緒に朝食を食べたが、早くもほほえましい交歓風景があちこちで展開された。彼等の中に英語をよく話せる者は5人しかいないが、皆カタコトや筆談で楽しそうに談笑していた。ワシントン高校のロバートミリオン校長は生徒達に「スマイルこそ万国共通のものだ。」と言って聞かせたそうだが、別の万国共通のシムボルを今朝は見る事が出来た。この世界旅行中の日本の先生達も普通の家庭人と変りはない。朝食の最中に彼等の多くは家族の写真をhostに見せようとポケットからとり出していたのである。……

しかし実は、この初めての馴れない場面をシラケさせないようにと我々が苦労した姿であったのが本当のところだったのである。けれども、この年齢と言葉を異にしたそれぞれの組み合わせは、わずか2日間の接触で極めて親密なものになった。団員は、自分の息子や娘をこの生徒の中に見ようとしたのかも知れない。そしてこのhost達は、態度、能力ともにすばらしい生徒達であった。

朝食がすんでから、我々は市の教育委員会を訪れた。ここには市長が出席して挨拶の言葉を交換し、教育長、同補佐官、中等教育課長などがこの地区の教育事情について説明をし質問に答えてくれた。

市の人口は13万人、市内に7つ、郊外に1つ高校があり、全部公立である。生徒は市内と周辺から学区によって通学する。どの学校もIQの極端に低い者を除いて希望者を全部入学させており、学力の格差はあまりない。IQ79～50の生徒に対する特殊教育の学級を持つ学校もある。卒業率は75%で途中で退学して就職する者もある。その学区の住民の傾向で教育方針に特徴が生れることもある。例えばアダムス高校の父兄には弁護士、医師、技術者、教師・などが多く、学校に対して規律の厳正を希望し、学校もこれに答えているとか、ワシントン高校は黒人や外国系の住民が多いので、「協力」「総合」を教育方針の第1に掲げているなどである。

アメリカでは6, 3, 3制が多く、6, 2, 4制もあると聞いたが、ここでは6校が3年制、2校が4年制である。全部総合高校制で、中を教育課程で普、農

工、商等に分けずに、各生徒か自分の進路や興味や能力を考えて、それにあった科目を選択する制度である。生徒数はいずれも1500名前後で職業教育の立派な設備を持っている。ノースリパティ高校だけは郊外にあって4年制500人位の小規模校である。しかしここにも50%の就職希望者があるので、これに応えるためのひと通りの設備を持つてはいるか、何といても貧弱であるため、近くの民間工場でアルバイトを兼ねた実習を行わせ、単位も出しているそうである。

教育委員会を出て、我々は10人ずつの3班に分かれてそれぞれか2校ずつ合計6校を見学することになった。私の班はライリーとアタムスが割当てになり、先ずその日と翌日はライリー高校を見せて貰った。

ライリーに着くとマット君か待っていてすぐ食堂に案内してくれた。食堂は、好きなものを自分の盆に入れ、金を払って席に運ぶ方式だが、品数、内容とも中々豊かでしかも安価だと思った。食堂は相当広く、収容力は大きいか、何しろ生徒と職員合わせて約1500人か全部昼休みに集ってくるので時間割を2本立てにしてラッシュを緩和しているそうである。この日は食堂の中央辺りに我々の為の特別の席か作られていた。机を並へ貞白なクロスをかけ、日米の小旗で名前のカードを飾ってある。そこで歓迎の会が行われたが、まわりて食事をしている沢山の生徒は、邪魔になるような大声の私語や食器の物音を発しないし、じろじろと珍らしそうに見ることもない。その場の状況をわきまえてそのように行動する大人っぽい態度だと感心した。歓迎会は、食事をしながら双方の代表が挨拶を交すのであるが、学校側の代表は校長と生徒会長である。生徒会長は、この学校のマークの入った運動シャツとかノートとかペナントとか色々な品物を、我々に説明して渡しながら挨拶をする。こういう場所で、生徒会長かこのような役割りを受け持つことは、我々の考え方によれば少々意外の感かあるか、生徒会活動の申の広さや、先生や生徒達自身か生徒会を重視する度合の大きさなどをあていろいろ聞くに及んで成る程と納得かいった。生徒会はできるだけ地域の人の助けになるような活動をし、地域の人もこれを支持しているという。アメリカでは大学へは自由に入れるか、一部のエリート大学では内申書による選考かあり、これには学業以外に生徒会の活動歴やスポーツ歴を重視すると言われているか、こういう活動だから大学も社会もその価値を充分認めているのであろう。役員は生徒の居住区を区画して選挙区を作り、上院、下院の議員を選ぶ。白人、黒人の役員の数のバランスを保つ為の規定を設けている学校もあるそうである。役員は人物、学業共にすぐれた者か選出され、生徒全体の信頼も受けているそうた。我々についてくれた男女白黒などのhostは

全部役員だと聞いて、成る程優秀な生徒かバランスよく選ばれているという話は本当だと思った。

さて昼食後は教職員休憩室に集って、校長、副校長、カウンセラーなどから説明を聞いたり質問に答えてもらったりした。それから授業や校内の施設を見学する為にhostの案内で学校中に散った。どこへてもhostに注文するとそこへ連れて行ってくれる。授業中の教室でもhostかついていれは自由に入入りてくる。休みたいと言えば休憩室に戻ってくれる。休憩室にはエプロンかけの女生徒かいて飲物や菓子をすすめてくれる。この様に生徒会か学校と周到に連けいをしながら活動している様子を我々は感動をもって見た。団員の誰もか、日本の自分の学校の生徒会にこれだけのことか出来るだろうか、やろうとするだろうか、させようとするだろうか、などと考えてみたに違いない。アメリカの高校生が、日本よりも優れている能力は、知識よりも創造力、企画力、応用力という様なものであるということを聞いたことがあるか、生徒会の活動もそれを育成する働きの一部になっているのかも知れない。

この自由見学は翌日の午前中まで続けられた。それからアタムス高校へ移動し、同様の日程でここを見学した。ライリーもアタムスも、規模、生徒の様子、設備の状況等よく似ている。共に80位の教室かあり、それに図書室、地下と屋外の体育施設、食堂などを備えている。

ライリー高校のマット君は静かで控え目で丁寧に心を配ってくれた。アタムスのガヴン君は大変積極的に自分が先に立ってどんどん私をひっぱって歩く。彼は就職するので機械の科目を勉強しているそうた。バスケットボールの選手で、自分のチームはとても強いんだと言って自慢する。自分か体育が好きなので体育関係の施設をくまなく案内し、トレーニング器具を自分でやって見せてくれたりした。ライリーでもそうであるか、日本の高校の普通の体育館よりやゝ広い位のgymが2つと飛び込みも出来る温水プール、とその附属の部屋かある。観客席の設備か整っているのはやはりアメリカ風である。洗濯室かあって大型の洗濯機か廻り、中年の女性か2人忙しく働いていた。きれいにタオルを畳んで山のように積み上げているので、聞いてみたらジムて使うということたった。これなど日本では一寸考えられないせい沢さである。生徒会もそうであるか、学校内でスポーツを盛んに行うのはアメリカの特徴であろう。コーチ制もしっかりしているようであり、毎夜のようにどこかて何かの対校試合を行っている様子であった。

しかし、何といてもこの見学で最も敬服したことは、生徒の進路と能力に合わせて多種多様な学科を設け、比較的少人数の学級てしっかりした授業か行われ

先生は生徒の信頼を受け、生徒は生き生きと眼をかかやかせて授業に集中し、意慾的に学習していたことである。

ここでは週5日制で時間割は毎日一定である。だから各生徒が受講する科目はどれも週5時間というわけである。これを1年間続けたものを各1単位と数えるから、1年間に履修できる単位数は数単位である。卒業に必要な最低の単位数は16とされ、そのうちの必修は英語（すなわち国語）と政治学が主で、数、理、社、保健が僅かずつある。半分以上は選択で自分の進路、興味、能力に合わせて決める。例えば進学希望者は数理などを中心にして単位の総数も多くとろうとする。科目の選択にあたってはカウンセラーが熱心に個別に助言する。英数は完全に到達度別で、これには壁なし学級などいろいろな工夫や試行が行われているそうである。

ライリー高校の講座案内によれば次のようである。

美術	写真1-2 芸術基礎1-2 彫刻1-2 絵画1-2 陶芸1-2 Drawing 版画 美術史
Business	計算実務1-4 タイプ1-4 速記1-4 Office Training 1-2 協同組合1-4 文書通信 記録保管 調査 事務法規
英語	英語1-8 文学作品 読書 新聞1-2 スピーチ1-2 20世紀アメリカ小説 演劇 映画 創作
外国語	フランス語1-10 ドイツ語1-8 ラテン語1-9 スペイン語1-8
保健	保健1-2
家庭	食物1-2 家族1-3 被服1-4 育児 住居と装飾 パーティー 裁縫 ししゅう
工業技術	設計製図1-4 金工1-2 印刷1-4 木工1-4 電気1-4 重力機械1-2 機械1-4 金属、工具1-2 テレビ、ラジオ1-2 自動車整備1-2
数学	算数1-2 代数1-2 幾何1-2 商業数学、事務数学1-2 三角法1-2 総合数学1-4 解折幾何1-2 微積分
体育	テニス 水泳 ソフトボール 人命救助 ダイビング タッチフットボール ヨガ バレーボール 重量練習 タンブリング 50マイル水泳 トランポリン トラック バスケットボール 体操 ボーリング ダンス
音楽	音楽一般 コンサート シンフォニー ジャズ 行進曲バンド 合唱 混声合唱

理科	小合奏 基礎音楽 音楽理論 ピアノ初歩 生物1-4 生活生物 化学1-4 物理1-2 生活物理1-2 地学1-2 天文、気象1-2
社会	アメリカ政治 世界地理 古代世界文化 現代世界文化 アフリカとアジア 社会学 心理学 経済 合衆国史1-2 時事問題

他の学校もこれと大体似ているが農業、園芸を持つ学校もある。

この多種多様な教科が実際にはどのように行われているのだろうか。美術関係を見ると、両校とも相当長い教室を3つ使い、その中にそれぞれの仕事をするコーナーが設けてあって、正に案内資料にある通りの種類の教科が行われている。各グループの生徒の数は数名から多くて10名位、中には1名のところもある。その代り、教師の方もかけ持ちの所がある。

音楽は教室の構造が更にせい仄である。広くて完全防音の部屋が少くとも3つある。その1つに入ってみた。廊下では殆んど聞えなかったのには耳を聳するブラスバンドの大音響、その曲に合わせてショートスカートの女生徒達が踊りながらバトンの練習をしており、全員が実に楽しく生き生きとして統制かをとれている。次の音楽室に入ると30人位の混声合唱で、音楽教師はピアノを弾き、助手（Hostの説明では）がタクトを振っているいろいろ注意を興えながら歌わせている。これも上手ではないが楽しそうでしかも一生懸命だ。

一番やさしい数学のクラスが見たいと注文して連れて行ってもらった部屋では  $x + 3x = 4x$  というところをやっていた。1年生が主のようで20人くらい、若い陽気な女の先生が  $x$  の前に1と色チョークで書き入れては何度も辛抱強くくり返して教えている。生徒も口々に答を言ったり大変積極的である。ここは9月始業だから今は入学してまだ1ヶ月位、それにしても高1でこれ位の授業もあるのに驚く。しかもそれでいて生徒の意慾的なことにはもっと驚く。

フランス語の教室へ入ってみた。LL教室の設備の部屋で、中を薄暗くして短篇映画を見せている。コミカルな内容で面白おかしい場面が仄山あるのに生徒は笑わない。ストーリーを楽しんでいるのではなく、レシーバーを耳にあてて一心に会話を把握しようとしているのだ。若しかしたら、何度も同じものを見ていて筋がすっかり分っているからかも知れないと思ってもみたが、そうだとすると生徒達の顔は真剣である。

必修科目の政治の授業も見た。生徒に盛んに発問をしながら進めている。発問や答の内容は私には理解出来ないが、板書を見ると地方政治の組織についてのことらしい。この授業でも、先生生徒の間には緊張感が

張っている。しかし終りのベルが鳴ると生徒はさっさと本をしまって席を立つ。「規律」もなければ「礼」もない。話には聞いていたが授業の途中から入ってこの終りの様子だけ見た時はやはり「何という失礼な」と思わざるを得なかった。しかし次の時間に新しく入って来た生徒達は、ベルが鳴る前に席について本を開き、始まるのを待っているのである。だからこれはこれで筋の通った習慣だと感心した。普通教科の先生もそれぞれ自分の教室を持っている。そこはその先生の研究室でもあり準備室でもあって、先生もベルが鳴ると同時に椅子から立ち上ってすぐ授業に入る。そして狂いなくベルと同時に授業を終える。教える専門家ならばその位のことが出来て当たり前だと言いそうである。教室は生徒数30人以下を想定してか狭い部屋である。

壁には広い書棚があり、生徒達はそこから教科書を出して使っている。家では勉強しないのだろうか。

職業教育の教室を見たいと言ったら、自動車整備の部屋へ案内してくれた。作業場と教室とかガラス戸で仕切られていてその時は講義の最中であつた。ジープでひげもじゃの先生が広い教卓の上に坐り、行儀の悪いかつ好で話をしている。しかし生徒は真剣で先生の口もとを一生懸命見つめている。作業場には大型の乗用車が3台入れてある。生徒か通学用に使っているものでこれが教材だそうである。この町では自動車がなければ生活できない。路線バスや電車がない上に、市域が広々としていて商店や公共機関も集中していない。高校生でも家の遠い者は自分の車で来る。(中学生以下はスクールバスが巡回するそうである)アメリカでは自動車の整備費が高いため将来の職業の為に選ぶ者だけでなく、自分で車を修理出来るようになりたいという理由でこの学科を選択する生徒も多いということである。

アタムス高校での2日目の午後、我々はこの学校自慢の授業をデモンストレーションとして見せて貰った。これは理科の優秀な生徒16人が、生物の先生の指導によって、個別に自分で設定したテーマの研究を進めている教室である。生物の基礎的知識を40項目に精選分類し、これを3年間てマスターした者が4年目にこの組に入る。(この学校は4年制)

ある生徒は、容器の中のラットの群の中へ空気に何かを混ぜて送り込んでいる。これは花粉のアレルギーに対する抗生物質の効果を測定しているのだと通釈を通じて生徒は説明した。彼等の研究は高度で、中にはアメリカ心臓協会、肺臓協会等から奨励金を受けている者もいる。研究そのものに対する奨励もあるし、将来性に期待してのものもあるそうである。

我々の見学は短い期間であり、言葉の通じないこともあるから、誤解も見落しもあるに違いない。しかし

我々の見た学習がすべて意慾に満ちたものであつたことは確かである。この様な制度やこのような生徒の意慾の高まりを可能にしている要因は一体何なのであろうか。それが我々の最も知りたいことであり、推論し合つたことでもあつた。しかしそれを解明する為には我々は、高校教育の背景にある“アメリカ”というものをあまりにも知らない。だから乏しい見聞や推測をつなぎあわせてみる他ないのであるが、第一に学校とは何かという考え方に特徴が見られる。教科目の種類や内容は、大学準備、就職準備、余暇活用に大別出来る。そして必修科目は「市民育成」に必要な最小限に留めて、他はその生徒に将来必要だと思うものを自身で考えさせて、それを大巾に選ばせている。学校が「生活の為の手段」として把えられ、教養的というよりはより実的なものと見なされている様に思われる。ただ我々としては、それ程誰もが早くから進路を決めてしまつてよいのだろうかという懸念をやはり持つ。もっとも、「独立心」を一般的に家庭教育の第一目標にして育てられるという彼等の意志は職業的自立についても意外に早くから考えようとするのかも知れない。そしてまた高卒後何年後でも進学の希望が生じた時には自由に大学に入れる制度になっていることも、早く決めることの短所を相当補うことになっているのであろう。

第2には、大学入試が存在しないことである。日本では入試が勉強の動機つけの1つになっている。しかし入試がないことによって、アメリカでは生徒が全く勉強しなくなることはなく、かえつて“自由にやれる”ことによるよい方向での余裕や意慾が生まれているのではないかということ強く考えさせられた。入試に追われる日本の高校生の方が、平均の勉強量は相当多いに違いない。にもかかわらずアメリカ合衆国を推進する“頭脳”の水準が、総合的に見たところ日本のそれよりも低いとは思えないのはどうしてだろうか。それは学術研究に投ずる予算の差であろうという人もあつた。それから又大学生の勉強の差だろうという人もあつた。大学にもよるだろうが、一般にアメリカの大学では相当勉強しないと容赦しないし、それが分つているから学術への意慾を持たない者は大学へ行こうと思わないということである。こうして“自然に選ばれた者”を大学では猛烈にしごくらしい。だから高校ではその生徒に応じた勉強を比較的ゆつくりとさせながら、将来への心の準備もさせ、“知識の記憶”以外の能力をも育成してゆくことが出来るのではないかということも考えられる。

到達度別の学級編成や、進路による科目選択によって劣等感を持つ生徒はいないであろうか。そしてそのことによる教育的なマイナスはないであろうか。日本

の教師であれば、というより日本人であれば殆どが持つであろうこの心配については、「全くないとは言えない。」と前置きしての答であったが、それは思いの他少いことが推測された。このことについてもその後にある彼等の精神的風土の違いがいろいろ考えられる。自由と平等はアメリカの看板だと言われている。自由な競争と機会平等の保障という原理又は要求は、教育の場合、その中でも特に“平等の保障”において我々の持つ考えとはかなり異っているのではないかと思われた。或いは又、独立心に優れていると言う彼等の大人っぽい精神構造は、このことについても合理的な面から捉え、納得しているのではないだろうかとも考えた。

第3に経費についてであるが、予算の規模を具体的に知ることは出来なかったものの、極めて大きなものであることは一目で明瞭である。設備については目を見張るようなものも多かったが、中にはあまりにも恵まれ過ぎているのではないかと思われるものもあった。教師以外の人員にしても、例えば両校とも常時7人の清掃営繕専門の作業員がいて終日校舎内外で忙しく立働いている。そしてヨーロッパでも一般にそのようであるが清掃を生徒にさせない。「金をかければそれだけよい教育が出来るとは限らない。」と言ったり、「アメリカの三悪税は警察、消防、教育だ。」という巷間の警句を紹介したりした校長もあったが、何と云っても多様多数の授業を小人数の生徒構成で行うことによって挙げている教育効果は、莫大な人件費が可能になっていることは言うまでもない。

生徒指導面での組織を見ると、日本と非常に事情が異なるのは、先ずカウンセラーの在り方である。各校に5人前後のカウンセラーがいる。豊かな経験が買われるからか50才前後と見られる女性が多い。カウンセラーの業務の内容は極めて多く、新入生オリエンテーション、コース選択や授業選択の相談助言、学業不振者の指導、進路情報提供、職業選択の相談助言、奨学金、各種テスト、両親との面談、対外交渉等とある。それぞれ350～400人程の生徒を受持つ。原則的には名簿順に等分して分担するが、問題によっては指導分野別に分担することもある。成績、適性検査、出欠などは正確に記録整理されており、それぞれの小さな相談個室の中に保管されている。毎日の欠席者は午前中の早い時間にカウンセラーの手元に集計把握され、すぐ適切な処置がとられる。父兄の連絡、無断欠席が3日続けは父兄出頭等である。「このように“水ももらさぬ”指導の体制をとっていても、それでもうまくすり抜ける生徒がいる。」とそこの校長は笑いながら話してくれた。担任の先生と仕事や意見がぶつかることはないか、という質問に対しては「生徒の為になるよう

に両者が協力することが大切であるから、対立したりいがみ合ったりしないように努力している。争いになりそうなこともあるが自分をおさえて話し合うようにしている。」と答えてくれたが、実際には日本のHR担任の業務に相当するものの大半がカウンセラーに委譲されているようである。カウンセラーは学校においても重視され、誇りと自信をもって仕事をしている。つまり一般の教師にはできるだけ教科指導に専念させ、生徒指導は別の専門家に委せるという分業方式であるが、その功罪についてまでは窮うことは出来なかった。教科の教師は週25時間の授業を持ち、それを含めて30時間の勤務が義務づけられている。授業時間以外の勤務時間の大半は授業準備に費しているという。

学校の健全さの度合は出席率が目安とされている。例えばライリー高校では95%以上であって、大都市の高校で50%位が一般的である状況に比べれば極めて良好になっているという説明であった。問題を起した生徒に対する処分は、小さなものは校長が行うことが出来るが、長期の停学など大きな処分は裁判で行わなければならない。裁判は非行生徒にも証人や弁護人がつき、陪審員もいて行われる。裁判所は教育のブレイキだと言った先生もいるそうであるから、ここにもいろいろな問題があるのであろう。最近では高校の非行が減少し、中学で増加する傾向があるということである。

我々はここで2晩、2～3人ずつに分かれて、先生や父兄の家庭の夕食に招待された。それはいずれも選ばれた家庭ではあろうが、極めて暖かくて健全な中流の家庭であった。この都市には歓楽街とか盛り場とかいうものは存在しない。それだけが理由ではないが親は家庭にいる時間が多い。子供もまた友人の家が離れていることが多いこともあって家にいる時間が比較的多いようである。親子が接触し、家庭教育がよく行われる条件はここにもある。しかし例えば親は子供にとってアルバイトをやらせるなどして自立心を養おうとしている。事実彼等の様子からは日本の高校生に比べて「大人」の感じを受ける。これは団員の誰でもが強烈に受けた印象のようである。なお、彼等のアルバイトは、他の家の芝翫り、屋根の雪下し、子守りなど健康的なものである。

我々はこの都市で、アメリカ教育の悩ましいものを、全くと言ってよい程見つけることが出来なかったが、先生方は問題がまだ山積していると言い、学校における人種問題などはやはり最も大きなものだということであったが具体的に知ることは出来なかった。我々が充分見聞出来なかった事柄はまだ多くありそうであるし、見たことの中にも、アメリカ全体には通じない、この州又はこの地区特有のものもあるであろう。

しかしとに角、戦後アメリカの教育を手本にし、その影響を強く受けて来た日本の教育が、これ又一步遅れて高校の大衆化の問題にぶつかっている現在、我々が視察した学校の状況は魅力に溢れ、そして数多くの示唆を示す様にも思われた。しかしその中に、我々がそのまま取り入れることの出来るものがあるだろうか。これはやはり慎重に考えなければ、と思わざるを得ない。例えば、我が国の進路状況や入試制度やその他の諸条件をそのままにして、教科の自由選択の中を拡げたとしたら、現在の高校教育のひずみを一面で更に大きく

するような心配か全くないだろうか。アメリカの教育状況が、それ自体として、又アメリカ人の生き方やものの考え方や諸制度の中で相関的に組み立っている状況を見たとき、我々が仮にこれを見習うとしても、部分だけを導入するのではなく、周囲の条件の改革や整備を、同時に行いながら進めなければならないと痛感したことを、もう一度新ためて記しておきたい。

最後に、限られた条件下で最大限の見学成果を与えて頂いたサウスヘント市の先生方と生徒に深く感謝するものである。